

学位論文審査の要旨

学位申請者	島本 和恵 ライフサイエンス専攻 2017年度生		論文題目	食からの子育て支援に向けた授乳状況に関する研究
審査委員	主 査:	須藤 紀子 准教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	赤松 利恵 教授		「否」の場合の理由
	副 査:	香西 みどり 教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	飯田 薫子 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	佐藤 瑤子 助教		<input type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (生活科学) (Ph. D. in Maternal and Child Nutrition)			<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
				<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

離乳期は乳汁栄養と固形食から、乳幼児の発育・発達に必要な栄養を摂取する時期である。乳汁栄養の摂取量によっては、固形食の摂取量が減少する。生後6か月以降の母乳栄養児において、固形食の摂取不足は、神経運動発達に不可欠な鉄の不足につながり、不可逆的な影響をもたらす可能性がある。鉄が添加されている乳児用ミルクを与えている場合も、咀嚼の訓練が不足し、咀嚼機能の獲得に影響することが報告されている。よって、離乳期以降の乳汁栄養の継続状況や与え方は、乳幼児の健康や、さらには保護者が抱える児の食行動についての悩みにもつながる。しかし、これまで離乳期以降の乳汁栄養の摂取状況とそれに関わる要因について検討した研究はなかった。

本研究は我が国の授乳・離乳に関するガイドラインや、日本の児の乳汁栄養法の現状に合わせた、児の発育・発達を妨げることのない、母子の個別性に応じた最適な固形食の摂取に向けたエビデンスの構築を目的とし、研究1では系統的レビューを、研究2～4では離乳期以降の固形食摂取を妨げない母乳の授乳方法の検討のための質問紙調査を行った。

本研究で得られた知見は以下のとおりである。

〈研究1〉日本のガイドラインに沿った乳汁栄養の与え方と発育・発達に関する系統的レビュー

生後9か月以降の児の乳汁栄養法、授乳状況や与え方と、幼児期以降の児の発育・発達との関連に特徴があることが示された。

〈研究2〉乳汁栄養の継続状況と乳汁栄養法、与え方の実態把握と関連についての検討

離乳完了期以降の母乳育児の長期化が示された。また、小食と関連のある乳汁栄養継続群と卒乳群との身体発育に差はなかったことから、小食ではあるが、エネルギーは摂取していることが明らかとなった。

〈研究3〉小食と関連のある授乳の継続状況・与え方と母乳の栄養価の知識および自律授乳の規則性の関連の検討

多くの保護者が母乳の栄養価を正しく理解しておらず、不規則に授乳していることが小食の要因であることが明らかになった。

〈研究4〉自律授乳の規則性および母乳の継続状況と保護者が持つ児の食行動の悩みとの関連の検討

授乳の継続状況や自律授乳の規則性は、小食以外の食行動と関連があることが明らかとなった。

これらの知見を地域保健の現場で情報提供することにより、保護者が抱える児の食行動の悩みを軽減する一助となり、食を通した子育て支援に貢献できると期待される。

申請者は、審査委員会における口頭発表と口頭試問ののち、加筆修正を行った訂正論文を提出し、公開発表会においては、質疑に対しても的確に回答していたため、最終試験も合格と判断された。

よって、審査委員会は、本学位論文が本学大学院人間文化創成科学研究科における博士(生活科学)の学位(Ph.D. in Maternal and Child Nutrition)にふさわしいと判断した。